

体育における運動技術の問題

永 井 康 宏

まえがき

体育という言葉が生れ、体育が教育の一領域として教育の中に取り入れられたのは近世になつてからであると言われる。然し乍ら体育的な事実—身体活動によつて何等かの人間形成を図ろうとした事実とえそれが単なる強い身体や体力であつたにせよ—は人類の古い時代から在つたものと考えられている。

文化人類学によれば如何なる時代如何なる場所においても人間は直接生命を維持するための活動あるいはそれに通じる職業活動の他に遊びと呼ばれる活動現在の言葉で言えば、レクリエーション活動を行つたと言うこと及びこのようなレクリエーション活動の中で身体活動が大きな分野を占めていたことが明かである。従つて人間は実にホモ・フアーベル、ホモ・サピエンスであると同時にホモ・ルーデンスでもあると言わなければならない。

体育はこのようなレクリエーションとしての身体活動、別の言葉で言えば遊戯やスポーツの人間生活の中における機能や価値を経験的に自覚することから、そのような機能を意図して身体活動を行うに至つた所にその萌芽を認めることが出来るのである。

そしてこのような身体活動実践の直接的な契機になるものは常に運動の技能あるいは技術であつて、技術を無視した運動実践は考えられず運動は常に運動技術の表現によるいろいろな欲求の満足が実践の動因であつたと言つても過言ではないであらう。

従つて「身体活動を通しての教育である」と言われる体育も、言い換れば運動技術の学習を中心とした教育であると言うことが出来、体育の内容として態度や健康安全等があげられてい

てもこれらは実際には運動技術との関連において考えられなければならない。

このゆえにスポーツ及体育の中核となる運動技術はそれが重要な意味をもつが故に一層その性格と体育の全体構造における位置づけを明確にしておかないといろいろな混乱が生ずる元になると思われる。例えば技術万能と言う考え方を醸成し、その結果体育を指導する教師が単一スポーツ技術の指導を即体育と考えたり、スポーツやその他の運動を行う者が公衆の面前でやる丈の専門的修練をつんだ人達に及ばないと直ぐ観客席に坐つて自らやろうとしなかつたり、又むしろ人間自身のために在るべき運動技術によつてかえつて人間が使われるようになり、技術的機能の発達によつて人間的な機能が偏頗となつたり、人間性を破壊したりするような懸念がないでもないからである。特に未成年者、自覚の未熟な者においてそのような危懼が多分に感じられるのである。

従つて私はこゝで技術を中心にして体育とスポーツとの関係を明かにし、体育に在つては技術は如何なる意味をもち、又如何に扱はれるべきかを述べて見たいと思うのである。

一、体育とは

我々が行う身体活動は全一一体としての人間の環境に対する反応あるいは働きかけであり、個々人の欲求、意志、知性、人格を現わすものである。

そして此のような身体活動は非常に多い。又、同じ身体活動でも年齢、職業、性、体質等に応じて、個人にとつての意味は異なるにもかゝらず身体活動が何等かの形で人間の成長発達—生物的、心理的、社会的—に影響することが知られている。人間の成長、発達に貢献するも

のを、教育的価値とするならば身体活動には教育的価値が潜在していると言うことが出来る。このような身体活動の中で特に人間形成の潜在的価値を多くもっているものを選び、あるいはそれを修正し、時には特に工夫して、そのような身体活動を創作し、それを行うことを通して、現実の人間を理想像にまで高めようとする営みが体育である。身体活動（正確に言えば体育運動）を通しての教育が体育である。具体的に言えば方法的に体操、遊戯、スポーツ、ダンス、野外活動等の大筋活動を行うあるいは行わせることによつて、活動者の身体的発達、活動力の保持、社会的形成を行い更に生活の健全化や社会問題の解決を図ることが体育である。

従つて、このような体育では「身体活動の実践」「実際に運動する」ということと、このような実践を裏づける教育的な意図とか、配慮と言うものが不可欠の要素であつて、此の二つの要素の欠けた体育と言うものは在り得ない。然し乍ら現実には単なる体育運動の実践がおのづから教育的効果をもたらす事実から、まゝ、身体活動の実践そのまゝが体育であると考えられることがある。例へば、スポーツの練習やゲームを行うことが其の儘体育であると考えられたり、芸術舞踊を練習することが直ちに体育であると考えられたりするものがそれである。

このような考え方は一面から言うならば確かに正しい。身体活動の実践を通し教育的効果をあげているからである。然しながら厳密に考える時はこれを体育と言うことは出来ない。スポーツは本来、活動過程を楽しむと言う心理に基づく遊戯の発達したものであつて、それ自体何等の教育的効果をも意図しない活動であるからである。

スポーツは元来「真剣に技術を追求、表現する活動過程に楽しみを求める(自己目的的活動)を本質とする」と言われるくらいスポーツに於ては技術の追求、技術の向上と言うことが中心となる。(芸術舞踊は美意識によつて創作し美的に身体表現することをねらいとするけれども心理的にはスポーツと同様技術の追求、表現が

中心となると思われているので以下スポーツの中に入れて考えることにする。)従つてスポーツが結果として教育的効果(体育が目指す所のもの)をもたらすことがあつてもそれは偶然の場合もあり必然性をもつていゝとは言えない。場合によつては逆の結果を招来することがありうる。

現にスポーツのためにスポーツをした結果身体的障害を生じたり、教育的管理の行届かない学校スポーツが種々の弊害を生じたりするのは我々の良く知る所である。

従つて一般に、身体活動の実践を直ちに体育とする考え方は余りに素朴で問題にならないが、ダンス、スポーツ徒手体操等の体育運動でもその実践を直ちに体育とする考え方は体育をその方法的、形式的、現象面だけから皮想的に判断し規定していると言わなければならない。体育運動の教育的価値は実践しさえすれば必然的に現われるものではなく、あくまでも可能性として潜在しているだけであつて、実践のし方が悪かつたらかえつて逆の結果を生じることもありうるのである。体育運動の実践を直ちに体育とする考え方は此の事実を無視して体育運動の潜在的価値を必然的なものとする誤りを犯しているのである。

体育運動の実践が体育でありうるためには、その実践が必ず教育的意図によつて裏づけられ、実践そのものが方法的に検討されているのでなければならない。

このことは、その発生の性格からして実践自体が既に体育に近い性格をもつと特に考えられ易い徒手体操にしても例外ではない。ましてや発生において楽しむことを目的とするスポーツには一層此の事が強く指摘されなければならぬ。

体育運動の大部分は形式的には日常生活の中に行われている活動と同じものであるが正確に言えばこれらが体育のために一定の(教育的)立場から利用される時のみ体育運動となるのであつて、それ以外の場合は形は同じでも体育運動(体育のための活動)ではないのである。体育が成立するためには運動の実践が不可欠であると同時に教育的意図や配慮が必要不可欠であ

る。

教育的意図や配慮は具体的には先づ、体育運動の選択、決定に向けられ次いで運動実践の方法に向けられなければならない。

二、体育とスポーツ

加藤氏はスポーツの成立必要条件として次の四つを挙げている。

1. 活動過程（活動の技術の表現追求）を楽しむ（心理的条件）
2. 身体を通して自己のもつ力の限界そのものを追求する（物理的、生理的条件）
3. 精練された競技規則
4. 競技者間の協力的人間関係

私も此のような条件を具えた具体的な活動そのものをスポーツと考えているが要するにスポーツは本来活動者の心理的動機或は態度から解釈すべき性質の活動であり、体育は教育意志（教育的意図）の存在から解釈すべき性質のものであつて体育とスポーツとはその範疇が異なる。（既述の通り）

体育はむしろスポーツを利用して、教育的効果をあげようとしているに過ぎない。そしてスポーツが体育の題材として非常に重視されるのは一つにスポーツが非常に興味があり、そのために活潑な自発活動として行われることにある。即ち学習は学習者の積極的、能動的な態度がなければ成立しないのであるが、スポーツにおける活動者の自主的自発的な態度、言わば活動そのものに没入する遊戯三昧とも言うべき態度が学習活動を活潑にして学習能率を高めるために利用されるのである。

次にはスポーツそのものが体育の潜在的価値を多くもつことにある。

即ち、具体的には、スポーツ種目によつて相違はあるが、何れにしてもスポーツが身体的、心理的、社会的方面の自然的傾向発現の機会を多くもつことは、人間の他の如何なる活動よりも優つていると言つても過言ではない。

現代の教育理論からすれば教育は単なる知育ではなく、民主社会に於ける望ましい人格形成である。学習は学習者が知識を吸収することに

よつてではなく行為すること、或は事態に反応することによつて成立するとされ、教育の方法として指導者のなしうことは教えることではなく学習者がある方法で反応し、そのように反応することによつて学ぶような事態を準備すること、そのような努力によつて学習者を助力すること以外にはないとされている。

若しそれが事実であるとするならばスポーツのもつ行為における自然的傾向の発現は其の儘極めて貴重な、教育の機会となりうると言えよう。

人間の自然的傾向は善悪の価値判断以前のものでありこれを全面的に否定することは人間そのものの生命の否定である。教育でなすべきことは、このような自然的傾向をそのままでもなく又、完全に抑圧するのでもなく健全な形で表現するように抑制純化することによつて望ましい性格や健全な人格を形成することである。そしてそのような性格や人格が環境との関係において行動的に形成される、或は事態に反応することによつてのみ形成が可能であるとするならばスポーツこそは最も人格形成における多くの潜在価値をもつと言うことが出来るのである。

然し乍ら現に行われているスポーツ形式の運動を見てそれが体育（正確には体育のために行つていくスポーツ）か単なるスポーツかを見分けることは実際には極めて困難である。理論的には活動者の考え方とか心理によつて区別出来ると考えられるが現象面からでは正確には区別出来ない。何となればどの場合でも活動者が活動最中に指向するものは興味の追求であり、それに基づく技術の追求と表現であるからである。体育の目標に掲げるそれ以外の身体的発達とか、社会的性格とか、健康安全等の、教育的なねらいについては、活動者は活動前には意識していても活動中には殆どそのような意識はない。もしあつたとしてもそれはむしろ遊戯三昧の境地から理性的な境地に立戻る瞬間々々においてである。そしてそのような心的態度こそ本来スポーツに他ならないのである。

従つて体育とスポーツの区別は、活動中の活動者の心的態度よりも、その活動を動機づけそ

して、活動中は意識の深層に位し、活動後に又反省評価の態度の基準になる活動者の活動に対する動機意識が教育的価値指向的であつたか、技術あるいは活動指向的であつたかを内省する以外にはないと思われる。

一般的に言つて未成年者の運動はどんな場合でも衝動的か意識が殆んど技術或は活動指向的である場合が多く（殆んど常に遊戯でありスポーツである）成年に近づくにつれ、又体育的自覚が深まるにつれ、技術あるいは活動指向的である場合も教育価値指向的な意識が入ってくるが多いと思われる。

従つて未成年者或は、体育的自覚の浅いものの運動は活動者そのものの代りに外部から教育価値指向的な意図が働かなければ体育とはならない場合が多い。そしてそのような外部からの働きかけが指導でありこれを行うものが指導者である。指導とは一言に言えば現実の活動を価値と結びつける働きである。

従つて現象的に体育とスポーツとを強いて区別しようとするなら未成年者においては指導者の有無が一応の目印となる。然し指導者が現にそこにいなくても活動が指導下にある場合もあるし又、自覚理解の深度は同一ではなく、場合によつては可成り深いものもあるので、指導者の有無が絶対的な区別の指標でもない。

要するに現象面だけからではスポーツを単に楽しんでやつているのか、体育のためにやつているのか区別がつかない。むしろ活動者は、常にスポーツをしているのであり、これを体育たらしむるものは、外部からの教育的配慮か、活動者自身の体育的自覚かであると言う他はない。

指導とは一面から言うと、此のような体育的自覚を深めることに他ならないのである。

三、体育における技術の位置

体育であれ、スポーツに於てであれ、運動の実践において直接活動者の努力の対象になるものは常に興味であり、具体的にはスポーツや遊戯における体力や技能（その表現と追求）であるように思われる。

如何に体育の目標に身体的発達、社会的態度の発達、健康安全等を掲げてこれに到達するよう運動学習をするのだと理解させ又、そのように計画しても、これらは何れも短時間の学習や練習で成就到達されるべき性格のものでなく、相当期間の経験の後に或は過程に形成されるものであるため活動者にとってはやゝ縁遠い。彼等は彼等にとつて最も身近な興味である「勝つこと」「出来る」「上手である」を目指して運動に努力し、そのような直接的な欲求を満足させることによつて自分の属するクラスやグループにうまく適応し、自信を得、自尊心を満足させているのである。

特に小学校段階にあつては子供達の幸福な楽しい生活の重要な要素の一つとして運動技能の発達（よりうまくプレイ出来ること）は熱望されていると言つてもよく、技能の未熟な或は運動を余り好まない子供はグループから嘲笑され忌避されまいと常にびくびくしており、勇敢な又技能に卓越した子供はグループで賞讃されるような傾向にあることが指摘されている。友達と一緒にうまくプレイすることが出来るということ程多くの子供に適合感を与えるものは他にないであろう。

従つて活動者は常に最も直接的で結果が直ぐ解り而も彼等の調整力に関係ある運動技能を目指して運動し、努力し練習もする。そして実際それ以外には在り得ないのである。

このことは体育においては活動者の目的意識、努力意識と教師の或は体育の目的意識とは常に一致するとは限らないことを意味する。又体育における他の内容一身体的発達、社会的態度健康安全等の習慣や態度の発達一と技能との関係について言えば、技能以外の内容はむしろこのように直接活動者に熱望され、努力の対象となる技能の修得向上を目指して活動者が練習する運動過程或は練習した結果に随伴し、連合して形成されるべき性格のものである。（これについては後で述べる。）

その意味では運動技能（或は技術）こそ体育の手がかりであると共に又中核であると言うことが出来るのではあるまいか。

体育とはこのように活動者が熱望する運動技術の修得向上の練習あるいは努力過程を正しくし、活動者の技術の表現と修得のための活動を他の活動によつて実現可能な教育的価値に結びつけ、活動者を全人的に発達向上させようとする営みであるとも言えるのである。

そこで問題になるのはこのような意味をもつ技術の体育における位置づけである。

スポーツにおいては技術の表現と追求こそはそのすべてであり、窮極的な目標である。然し体育ではどうであろうか。

技術に対する練習から体育でねらう身体的発達態度の形成等が成されることから、技術が体育にとつて、手段的な意味をもつことは了解される。然し運動技術は単に手がかりであり手段に過ぎないものであろうか。

私には技術の本質は媒介性にあると思われ。従つて窮極的には運動技術は人間にとつて生きるための手段的な意味しか持ち得ないであろう。主体は人間であり、技術は人間が生きるための技術なのであるから。

然し乍らその前の段階生きるにしてもその生き方をよりよく生きるかより幸福に生きるかと言う生き方が問題になる段階においては運動技術は幸福とかよりよい生活をもたらす内容をもつものとして人間の目標となり得ると思われる。運動技術自体が人間にとつて必要と思われるのである。

従つて体育においては技術は手段であると同時に目標でなければならぬと思われるのである。勿論運動技術は体育における唯一の目標でなく、他の諸目標を媒介しながらもそれ自体教育的価値をもつ、諸目標の中の一つとしてである。その理由を以下に述べたい。

四、運動技術とは何か

普通我々が運動技術と言っているものは何だろうか。我々が普通運動技術と言っている場合にはスポーツやダンス等がうまく出来ると言う「能力」を意味していることが多いように思う。

即ち、「技術を持つ」とか「技術がある」と言う場合にはそこに現示され、行われた運動の

し方（実践）そのものではなく、そのような運動の実践を表示することが出来た活動者自身の能力、技能を意味しているからである。そしてそのことは「技術を持たねばならない」と言う言い方をする時一層はつきりする。

然しながらそのように活動する主体を仮想し活動主体と関係づけて技術と言う言葉を使う場合はそのような意味があるが、単に運動技術と言う場合には、運動の場に示される運動のし方（行為実践）そのものを意味しているように思う。バスケットボールの技術と例えばボールを持つてパスしたり、ドリブルしたり、シュートしたり等をするのであり、体操の技術と例えば、徒手で、或は器械を使つて身体をうまく意図する通りに操作すること自体なのであるから。

従つて運動技術と言う言葉には、実践された運動のし方（スポーツの各種目毎にルールで規定されているような運動のし方）と言う意味と、運動技能（そのような運動をなし得る運動者の能力）と言う意味との二つがあると思われる。然しながら運動技能はそれだけでは現実的に技能ではなく運動の場で運動のし方に表示されてはじめて、現実的に技能であり得る。（又同時に、それは運動技術でもある。）むしろ運動技能は運動の場に表示された運動技術から主体的側面だけを抽象したものであるとも考えられる。従つてこのような関係から両者は同じ意味のものを現に顕われたものとしてみるか、可能態として見るかの立場の相違に過ぎない。然し何れも活動によつてのみその存在が知られる点では共通である。

ただし、単に運動技術と言っている運動の内容は実際には生活活動や、労働ではなく、遊戯スポーツ、ダンス等の体育運動特にスポーツを意味してはいるが。

運動技術はそれが存在することは確かであるが「これが運動技術である」と指摘することが出来ないものである。

我々は唯活動者の活動のフォームや彼が作り出した運動の記録から技術の存在とその程度を推知することが出来るだけであつてそれ以外には知ることが出来ない。そして記録は曾つてそ

のような技術が確に在つたことは知らせるけれども現在尙その技術があるか否かについては知らせない。唯記録が、出された時から余り時日を経過していない場合には活動者に尙そのような記録を出しうる技能があるだろうと推量は出来る。然しこれも余り長い時日を経過した後では、そのような記録が再生産されない限り活動者の技能の残存さえも疑問に思われるのである。

このような点から運動技術は固有な存在性をもつものではなく人が行う具体的な身体活動（或はそのフォーム）に即し又彼が運動に於て生み出した記録（成績）に即してのみその存在を知られる性格のものであり、運動が行われないうり何処に存在しない性格のものであると言うことが出来る。

このことは運動技術がどのようにして成立するかを考えれば更によく解るであろう。

運動は一定の運動環境とそこにおいて運動しようとする人間との積極的な働き合いがなかつたら起らないのである。立派な運動施設や道具があつても人間の方にそれを利用して運動しようとする積極的な意欲がなかつたら運動は起らないし、又意欲はあつてもそれを充すような環境がなかつたら運動は起らない。運動が行われなければ技術は生れない。従つて運動技術が成立する（生れる）ためには、人間の意志と運動の環境との二つの要素があり、然も此の間に積極的な働き合いがあつて運動が行われなければならないのであつて、実際に運動が行われないうり場合には、在るものは人間の主観的な観念—あのようにすれば出来る。このようにする。こうでなければならぬ。このようにしてやりたい等の一と環境との対立だけである。その意味では曾つて良い記録を出した活動者も再びそのような記録を出さない限り現在尙その技能を所有しているとは言えない訳である。

運動技術は運動に於て示されない限り何処にも存在しないものである。

生産技術としての運動技術

今日一般に技術と言えば生産技術を意味する

ように技術と生産とは関係が深いように思われる。三木清氏も「技術の本質は生産する、物を作ることにある」と言つている。然し技術の本質が生産にあるから生産技術が唯一の技術だとするのは余りに狭い考え方であろう。

生産技術は（いわば）物質的経済的な生産に関係する技術であるが、これが今日単に技術と言へば生産技術を意味する程までに考えられるようになったのは、自然科学と結びついて機械を発明したり、原水爆のような物質を生産して、社会、政治、経済、文化、道徳等人間生活の凡ゆる面に重大な影響を与える力をもつたからに他ならない。元來技術は「知性によつて人間が新しい環境に適應するために発明した行為の形」或は「人間が環境を改造していく行為」等と言われるように人間と環境とが対立した時生れるものであるから、技術は環境との関係から考えられねばならない。今日我々の環境と考えられるものはいろいろあり、従つてそれに依じていろいろな技術が存在しうるのであるから、物質的生産に関する生産技術のみを、技術とする考え方は、生産と言うことを余りに狭く考え過ぎているよう思われる。もし技術の本質が生産することであり、生産が物質生産のみを意味するものなら私がこゝで問題にしようとしている運動技術と言う言葉の存在自体すら無意味である。

運動技術は物質生産と言う点から言えば外に何物も生産しない技術である。然し技術の本質が生産にあるとすれば運動技術も何かを生産する筈である。それでは運動技術の生産するものは何だろうか。私はそれを運動の記録やフォームであると考え。運動の記録やフォームは文学や音楽、絵画、彫刻等の作品に当るものでこれは運動技術が作り出したもの或は運動技術の表現物である。然しながら運動技術の生産物が他の芸術や技術の生産物と違ふのは、生産物がそれをつくり出した人間主体から独立して存在することがないということである。他の芸術や技術での作品や製品は皆それを生産した人或はその人の生産する行為から離れてその作品或は製品自体で価値とか存在意義をもつことができ

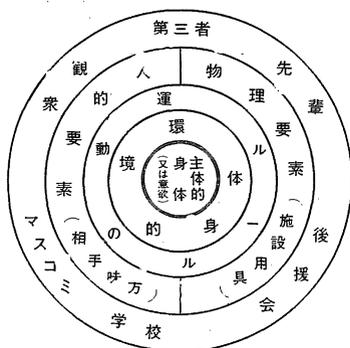
る。然し運動の記録やフォームは何時でもそれを生み出した活動主体から離れて別に存在することが出来ない。フォームは活動者の活動のフォームであつて、それは生産者、生産活動、生産物に当てはめて言えば生産者の技術的な生産行為そのものが生産物であること言うことになる。兎に角フォームが活動者と切り離せないことは明である。記録は一見独立して存在するよう思われるが100米10秒もそれを生み出したランナーと一体的に考える（ランナーの技能を常に想定する）からこそ意味があるのであつて、それを生み出した人を考えない100米10秒の記録は単なる文字の配列に過ぎない。それは芸術技術の作品や製品とは全く性格の異つたものである。この故に運動技術の生産物は保存が効かない。従つて運動技術は生産という点から言うならば生産活動主体を離れることの出来ない、従つて保存のきかない生産物を生産する技術である。と言うことが出来る。

このような運動技術の性格は運動技術に於ける身体の性格と密接な関係があるからであろう。

五、運動技術の内容

運動技術は運動のフォームや記録を生み出す技術である。そして一般に技術は人間と環境とが対立した時これを調和するために生れるのであるから、運動技術はこのようなフォームや記録が生れる環境との関係から考えなければならないと考えられる。

運動のフォームや記録の生れる運動環境は運動種目によつても、又運動の行われる場によつても異なるが、一般にフォームや記録に關係のある要素を大まかに分析すると次の如くなるであろう。



(1) 身体

運動のフォームや記録は一定の運動環境に人間の意志を生かす所に生れる。然しいくら環境があり意志があつても実際には此の二つを媒介する身体が動かなかつたら運動は起らないし従つてフォームや記録も生れない。

従つて運動が行われフォーム記録が作られるためには先づ自分自身の身体が「意志する通り」に動く或は動かせることが必要であり、その次に意志通り動く身体で外的運動環境に働きかけると言う形にならなければならないように思われる。

然し現実にはこの二つの過程は殆ど同時に一緒になつて行われる。即ち一定の外的運動環境に直接働きかける或は働きかけられることによつて、それに応じ得るように身体を意志通り動かすよう努力し練習するからである。

何れにしてもこれらのことは運動においては身体が環境的な性格をもち又道具的な意味をもつことを示している。運動技術はこの道具としての身体と非常に密接な関係がある。

運動はすべて外面的には時間的・空間的な物理的現象としての力学的運動であるが、その運動の根源となるものは常に人間の身体の構造と生理機能であり、如何なる運動もこのような人間の身体構造と生理機能の範囲を出ることは出来ない。

我々は鳥や魚のように行動することは、他の道具を使うことがない限り不可能である。

従つて人間の身体の自然的条件は先づ運動形式を規制するものとして環境の意味をもつのである。我々はこれによつて規制された運動形式に対して自己の意志を最大限に生かしていく所に技術を生むのである。

次に人間の身体は運動意志を制約するものとして環境の意味をもつと考えられる。

我々が幾ら運動しようと思つても不具であつたり、非力であつたり、病的であつたりしたら優れたフォームや記録を作ることは勿論、運動すること自体も困難なことが多いからである。第一身体に欠陥があれば運動意欲さえ減殺されるのが普通である。このことは一面身体が道具

の意味をもつことでもあると言えよう。然し運動において身体が道具的な意味をもつことは困難な運動に直面することによつて一層良く解る。例えば鉄棒で逆上りをしようと思つても思うまゝに上れない場合には自己の身体でありながらそれが自分でない物体のように感じられ、意欲のみが自己と感じられるからである。

手や足など身体の一部が特に道具的な性格を示すことは他の活動でも勿論認められるが、運動では身体全体が道具的な性格を示す所に特徴が認められる。そしてこれが最もはつきりするのには単に身体のみで行う運動或は固定的な施設を使つて行う器械運動やダイビング等であろう。これらでは身体が自分の意志通りに動かない時かえつて身体の道具性を痛感するのであるから。このような道具性をもつものとして身体は環境としての意味をもつのである。

(2) 運動のルール

ルールの中には施設用具等の規格を規定するものや、運動の形式や活動の方法を規定するものが含まれる。

ルールは発生的には長い経験によつて生じて来た慣習の成文化であり性格的には運動社会の「法的なものであるが大部分は直接運動技術に関するものであつて、これによつて活動者の行動に制限を加える。従つてこれは人間が運動実践を規制するために作った条件とも考えられる。このような条件に規制された運動形式に対し人間がベストをつくして活動を行う所に運動技術が生れるのであるからルールは運動の環境要素の一つである。

(3) 物的要素

総体的にはルールによつて規定される。然し人間の活動に最も直接的に物理的、生理的、心理的影響を与える。具体的にはグラウンド水体育館器械その他の施設やボール、砲丸、槍、バトン等の用具類。

(4) 人的要素

競技形式によつて又個人単位のものか集団で行うものかによつて異なるが先づ競争相手があればチームゲームでは更にチームメート (team-mate) があげられる。何れも成績に關係

する要因である。

(1) 競争相手

コンテスト (contest) 形式 (体操、ダンス、跳込等の達成能力比較競技) では心理的な影響を与える。

コンペティション (competition) 形式 (陸上、水上競技のような角逐競技) 及身体的接触を禁ずるチームゲーム (team game) (バスケットボール、バレーボール等) でも心理的な影響を与える。身体的接触を含むチームゲーム及コンバット (combat) 形式 (柔、剣道、ボクシング、相撲等の格闘競技) では物理的 (生理的) 心理的な影響を与える。

(2) チームメート

身体的接触を禁ずるゲームでは心理的な影響、身体的接触をするゲームでは物理的 (生理的) 心理的な影響がある。

(3) 第三者

活動者競技者以外に外部から強い心理的影響 (圧力) を与える。具体的には観衆、応援団、報導関係者、母校、国家伝統等である。

場合によつてはこのような第三者が存在しない或は明確に意識されない場合もある。

以上のような環境要素を考える時これらの環境要素との関係から運動競技には少くとも次のような内容が含まれている或は含まれなくてはならないと思われる。

(1) 身体を支配する技術

運動の原動力を提供し又直接運動の道具としての意味をもつ身体機構を意志通りに働かせる技術である。

新しい運動形式或は困難な運動形式に直面すると意欲と身体との対立を経験するが、意欲も実は身体と別個に存在するものでないことからすれば身体には主体的な面 (喜び、楽しさ、苦しさ等を感じたり、意志したりする) と道具的な面とが在ることが了解される。(身体の二重性格) 従つてこれを「活動において身体は二重性格を露呈し主体的身体 (意欲) と環境的身体との分化を見る」と言つてもよいであろう。そして主体的身体と環境的身体とが分化した場合には「主体的身体は環境的身体から抵抗を感じ、

それを契機にしてこれに統制を加えようとし、環境的身体は統制を受けつゝ活動するようになる」のであり、このような統制過程が練習と言われるものであつて、練習の結果としては、意志しさえすれば、身体が自動的に適応行動をとるようにならるのである。練習の結果生れるこのような身体活動の自動化を普通身体支配と言い、それによつて現われるよいフォームから身体支配の技術或は身体的技術を考えるのである。が、身体支配の技術は一面から言えば環境的身体の主体化—抵抗感が無くなり、身体が意志通り動くようになること—の表現であり、他面から言えばそれ自体可変的な身体の生理的機能特に内臓機能及神経系統の機能—運動感覚、視覚、相関神経作用、筋肉の調子等—の発達の表現であると言えることが出来る。

そして身体支配の技術には大体次の二つを考へることが出来る。

(1) 他に道具を用いない身体支配の技術

徒手体操ダンス等のように自己の身体以外には道具がないような場合の身体を支配する技術である。

このような環境的身体の主体化(身体支配)は成長に伴つて自然(実際は自然ではなく生活の必要から意識されない練習の結果であるが)的になされることもある。日常生活に用いる歩行等の簡単な活動や動作等がそれである。然しスポーツ等における特殊な身体支配力は皆一定の運動形式に当てはめて自己の思うように身体を動かしたい欲求に基く練習から生れる。従つてそこに技術が考へられるのである。

(2) 道具や物を支配する技術

ボールとか砲丸槍などの用具を使いこなす技術、或は鉄棒跳箱等の器械や水等の運動形式を規定する外的条件としての物を支配する技術である。

施設や用具を使うスポーツ等では環境的身体が主体的身体(又は意欲)によつて統制(主体化)される際に、更に他の外的物質的環境要素(ボール、槍、鉄棒、水等)にも適応調和していかねばならない。従つて環境的身体の主体化(身体支配)は一層困難である。反面これによ

つて得られる身体支配力は一層高度であると言える。

ダンスや徒手体操のような運動においてもボールや鉄棒等を使う運動に於ても、スポーツにおける身体支配の技術の形成過程の機構は同じことである。即ち必ず何等かの環境からの働きかけ—それはルール等のように非物質的なものでも、ボールや鉄棒のような物質的なものであつても—があつて、それに適合させるように主体的身体が環境的身体を統制するのである。直接主体的身体が環境的身体を統制するのではなく、必ず外からの働きかけを媒介して内(環境的身体)を統制するのである。物質的なボールや鉄棒等はその存在と働きかけ(物理的・心理的)がはつきり認められるが、ダンスや徒手体操等の用具を使わない運動では外からの働きかけが眼に見えない運動の形式であつたり創作の原理であつたりするので、はつきり意識されないだけである。

唯、物質的な道具を使用する運動では道具を支配する練習をする前に既に或る程度自己の身体(環境的身体)が主体化(意志通り動くようになる)されていることが必要で、それなしに直接物の支配に向うとかえつて主体的身体(意欲)と環境的身体の分裂を一層大きくし、主体化を不可能視させ或は長びかせる恐れがある。

身体支配の技術は一見、消極的な、環境に順応する性格の技術のように思われる。確かに与られた運動形式や施設用具等に自己の身体を当てはめて行く点ではその意味が強く外的環境を積極的に作り変える働はない。然し運動は単なる順応ではなく、むしろ「自己の力の働きによつて能動的に(外的)環境に順応していくこと」である。従つてその結果として外的環境をでなく内的環境—身体の機能や形態—を変えていく、身体を形成していくのである。身体支配の技術は身体を作り上げるのである。

(2) 心の技術

自分の心を支配する技術である。

三木清氏はこれについて「理性と情念(feeling)との間に主体と環境という関係が考えられ、理性は自律的なもの、情念は身体的なもの

と見られ、情念は環境から規定されるものと見られる。理性と情念とを統一して心の形を作ることが心の技術である」と言い、更に「物の技術では主観的なものと客観的なものとの統一が、物を変化し、変形することによつて客観の側に実現されるが、心の技術ではこれが心を変化し変形することによつて主観の側に実現される。」とも言っている。

三木氏の情念は感情的なもの一切を含む広い概念であろうが、運動では特に情緒（情動）を中心的な対象と考えたい。

情緒がどのようにして起るかはおいても情緒があらゆる行動の背景にある行動発力（generative forces）として運動の場における行動に影響を与える事実は認めざるを得ない。例えば「あがつて日頃の実力を発揮し得なかつたり」、「相手に吞まれて固くなつたり」、「緊張して固くなつたり」、「相手を怒らせれば試合に勝てる」と言うような事実はよく見聞したり体験したりするからである。確かに激しい情緒が活動の円滑さや安定性を奪い—不安、恐怖、悲しみ等から活動が抑制され怒りは動作を荒ぼく粗雑にする—平静な或は愉快な気持や気分の中には活動が安定し動作はのびのびと大きく、しかも正確であるのである。これらについては「自律神経の中枢と感情の中枢とが極めて接近しているので互に影響を及ぼし易く、自律神経機能が影響を受け諸臓器に変化を起す」とか「ホルモンの関係」などが考えられているようである。このような事実から活動者はよいフォームや記録を作ろうと思えば思う程運動や試合の場で「あがつた」り「固くなつたり」することがないよう情緒の安定が必要になる。情緒は本来生得基本的なものから行動と密接な関係をもつて発達した反応型式であつて生理的なものと一体的である。このような情緒に対して意識してその安定に努力することは、情緒を独立した運動の環境要素の一つと考えることに他ならないわけで、そこに運動技術の内容としての心の技術を考えることが出来る。

心の技術は運動の場の緊張が高まれば高まる程、従つて大きい大会とか、第三者の介入する

余地が大きくなればなる程一層必要となる。

(3) 他人の心理を支配する技術

同じく競技にしても、コンテスト形式、コンバット形式、コンペティション形式、チームゲーム形式と競技形式が違へば活動者相互の与える心理的影響は異なるが、何れにしても何等かの形で他人から心理的な影響を受け、又他人に与えている。そしてその際他人や第三者からの心理的影響を受けないにする対自的なものが心の技術であるとすれば、逆に他人の心を自分の意図に合致させようとする技術も考えられる訳である。これは所謂「演出」とか「演技」とかに通じる一種の社会技術と言えるかも知れないが確に存在しうるし又必要である場合がある。例えばコンテスト形式では観衆（審判）に対してアピール（appeal）するような技の「決め場」とか「見せ場」とか言つたものがないかつたら平凡な或は平板な技に墮してしまふであろうが、此のような技の要点は一種の他人の心を獲える技術に通じるからである。又フェイント（feint）と言はれる欺瞞技術も競争相手の心理を自分の支配下に置く意味をもつと思われる。一般にコンバット形式では心身を挙げての人間対人間の闘いと言う意味が強いので此の技術が自然に必要になり又行われる。又策戦は多分に相手の心理を支配するという意味が含まれ策戦を要する競技程この技術が必要になる。

モラル（士気）—（ある集団のメンバーが成員であることに満足と誇りをもつて結束し、集団の共通目的の達成に向つて積極的に努力しようとしている感情ないし、態度（野田一夫）が高ければ、或は高いモラルのチームではチームワークがよい訳であるが、モラルにしてもチームワークにしても心理的には味方のチームメートの間で相互の心理支配がうまく行つていることであると言つてもよいだろう。支配は先づ相手の心理に従いつゝ働きかけて自分の意図を生かすのであるが、目標が同一である場合はそれは協力となるのであるから。

兎に角このようにチームゲームであれば味方のチームメートに対する心理支配—愛情、尊敬、理解等—が必要であるし、又直接相手と対抗し

て行う競技では相手に対する心理支配が必要になる。

従つて所謂運動技術とは上記のような三つの技術を内容として含む、運動フォームや記録を作るための技術の総合名称であると言えよう。

勿論これらの技術は結局は運動の場における身体の活動に集約して表現され認識される。

従つて其の限りでは運動技術を身体支配の技術或は身体的技術として捉えることは間違ひではない。そしてこれを生理学的に解明することも間違ひではないと思う。然しながら運動の場特に試合の場で捉えられる身体的技術は相当多くの心理的な影響を含んだもので、いわば心理的生理的機能の総合されたものが生理的に或は身体的に現われたものである。

それに対し練習の際に捉えられる身体的技術或は生理的機能は比較的的心理的な影響の少ないものである。勿論どんな場合の身体的技術も心理的生理的機能の総合でないものはないが、練習の場と試合の場では心理的な影響の度が違うと思われる。(心理的影響の多少は客観的な測定や把握が困難であるので推量の域を出ないが。)従つて練習の際の身体支配の技術によつて出されたフォームや記録がそのまま試合の場で出されるためにはこのような心理的影響をなるべく受けたくないような何等かの処置が考えられなければならない。実際には身体支配のように取り出して練習すると言うわけにはいかないが。

六、運動技術の性格

(1) 運動技術の合理性

運動技術は活動者の意志が夫々の運動環境の制約を受けながら生かされて運動する時生れる。

所で環境の中で自己を生かす、或は環境を支配するためには先づそれに従わなければならない。何となれば環境を支配するためには先づ環境を支配する客観的な法則を認識し、それに従いつつ環境に働きかけるのでなければ不可能だからである。運動環境を支配しているものは物理的環境を支配する物理学の法則、身体を支配している生理学の法則等である。心理的な影響

は物理的な性格のものではないのでそれ自体の客観的な法則の把握はやゝ困難であり、生理的現象との関係において、或は生理現象に含めて考えなければならない。しかし、要するに運動環境を支配しているものは因果の法則であると言うことが出来る。

運動技術はこれらの法則に従いつつ、自己の目的意志を生かすべく運動する所に一つの形態(フォーム)となつて生れるのであるから、このようにして生まれる技術は一つの目的必然性と言つたものと考えられる。

目的必然性とはこの時この場でこの道具を使って目的を達成するためには必ずこのようになければならないとされるものである。具体的に言えば運動の「コツ」とか「要領」とか言われるものに相当するものである。これは人間の意志に基いて目的的に再構成されたものである点から言えば主観的なものと言えるかも知れないが、人的物的な環境要素(身体、ボール等の道具や施設)から規定されている点では人間の独断で構成することも変えることも出来ない客観性をもつもので、人間は唯そのように行動するよりし方がないのである。そしてこれはむしろ表現された技術から逆に考えられるべきものであるが。

従つて運動技術は少くとも次の三つの合理性を備えていると言えるし又備えなければならない。いわば運動技術がこのような合理性を要求するのである。

(i) 科学的合理性(因果法則的合理性)

運動技術は物理(力)学的、生理学的(心理学的)法則に合致するものでなければならない。

(ii) 目的論的合理性(合目的性)

目的論的構造とは常に全体が部分を規定し、一つの部分は他の部分と、そして各々の部分は全体と相互に依存し何れの部分の内にも、全体の意味が表現されているような構造であるが、運動技術もこの部分のような意味をもつて、目的に適うものでなければならない。

(iii) 経済的合理性

運動技術はエネルギー効率から言つて最少の消費で最大の効果をもたらすものでなければな

らない。

このような合理性を要求する点から、「運動技術は因果の法則の働く運動環境の自然必然の系列を目的意識を働かせて目的必然の系列に変える所に生れる」とも言えよう。

(2) 運動技術の創造性

運動技術の目的必然性は運動の実践においてのみ認められるもので、運動に実現されない限り何処にも存在しないものである。従つて運動技術は運動の度ごとに創造されると言える。しかもそれがそのまま残留持続するのではない。フォームが見られなくなれば技術も又存在しなくなる。残留し持続するものは技術に媒介された身体や心意の変化、技術に関しての知識だけである。これらは次の運動における内的環境としての意味をもつか主体的なものとなるかであつて、決して技術そのものではない。

技術は唯そのつどつどの運動環境の条件と活動主体の意志とから運動に於てフォームや記録として創造されるだけであつて、運動が行はれない場合には、在るものは客観的な環境の自然必然性か活動主体の主観的な目的観念かだけである。

然し主体に残留持続する身体や心意の変化や知能等は普通運動技能と考えられている。そしてこれに基き更に運動環境に働きかけて唯一の完成された理想的な形に向つて、フォームや記録に運動技術を表現し、それを見て反省しては又表現しつゝ、フォームや記録を変えて行く。

(だが実際の運動技能は運動に技術として表現しない限りは技能にならない訳である。けれども、短時日の間には身体や心意、知能は余り変わらないだろうと言う、経験に基づく仮定から残留持続する身体、心意の変化等を運動技能と考えるのであろう。) このような創造の過程を普通練習と言うのである。従つて練習は決して単なる反復ではない。運動による創造的な身体や心意の変化(普通練習効果と言はれる)が著しいか著しくないかの違いだけで、変つていることは変つているのである。身体や心意はそうに変らないようであつており、著しく変つているようであつて大して変らないものと言われている。

運動技術の練習は既に明にされている目的必然性(後から述べるが運動技術の知識とか法則と言つたもの)を実際に行つて見て自分の身体に適合するようにして身につけること(実際の体得)と理想的な目的必然性の実験的探究と言う二つの意味をもつ合理化と創造への努力であるとも言えよう。

(3) 運動技術の社会性

運動技術は元来社会的なものである。

運動技術は個人の運動によつて実現されつゝ存在するに過ぎないから、その点から言えば確かに個人によつて発見され或は運動のつどつど創造されるものであるに違いない。しかしながらフォームや記録を出すために表現された技術は誰にも理解され又模倣され又伝達しうるものとして社会的な普遍性をもっており、一つの文化財として歴史的に伝承され、社会的にも模倣、移入によつて伝播されて来ておる。又将来共伝承伝播されるであろう。現在の我が国のスポーツは皆このような経過をとつて来る間に時代や社会の影響を受けて、現在のような形態のものになつて来ているのである。従つて新しい運動技術(それは運動形式にせよ形式の中での所謂技術にせよ)であると言つても既存の運動形式や運動技術の蓄積があつたからこそ、それらの新しい結合として生れたのだと考えられ、決して単なる能力の優れた個人の努力のみに依るとは考えられないのである。従つてすべての新しい運動技術の工夫の刺激や構想の実現としての発明も結局は社会的に蓄積された文化の程度に依存していると言わざるを得ない。

運動技術はこのようにして生れるものとして本来社会的なものである。

運動技術がルールを環境とし競争を一つの表現形式としていることを考えれば一層運動技術が社会的なものであることが了解される。

即、各種スポーツのルールは発生的には長い経験によつて生じて来た慣習の成文化であり、性格的には運動社会の「法」とみることが出来るものである。そしてその内容は道徳的な行為規範についてのものもあるが、大部分は技術に関するものであつてこれによつて活動者を拘束す

る。然しながらその拘束の性格はシュタイツァーが「ルールは活動者が競争と言う目的を達成するために協定する条件で、同一条件の下における競争を確実にするのに役だけ」と言うように、平等な条件を保証するためのものであり、然も権力者によつて定められた強制的なものでなく、相互の協定したもので強い実効性をもつ所に特徴がある。

このような独自の性格をもつルールの制約下に行われる競争は同一目標を目指す個人或は集団間の相互肯定的な結合関係を前提にしなければ成立し得ない。従つてこのようなルールの下での肯定的な人間関係の間に生れる運動技術はそれ自体文化的なものであると共に社会的なものであつて「人格及社会の紐帯」として人間を結びつける働がある。このことはレクリエーションに参加した人や試合での競争相手が、社会的な地位や身分を越えて親密になつたり国際間の紛争対立を越えて親和し合う実情からもよく了解される。

運動技術は人間の結合を媒介するのである。

又チームゲームでは同一目的達成のための分業的協力言い換えれば集団構造の体制化自体が運動技術の重要な内容となる。従つてチームゲームでは運動技術の練習がそのまま集団成員の社会化を促進する機構にある。

レクリエーションは古くから自己表現を通じて人格、健康、個性を健全に発達させるために誰にも必要なものいわば基本的な人間要求であつた。然し社会の変化に伴つて余暇の量は増す傾向にあるにも拘わらず、創造的表現のための機会は益々少なくなつてくる傾向にあり、そこからいろいろ社会上教育上の諸問題が持上つて来た。レクリエーションの問題は現在では最早単なる個人の問題ではなく社会の問題にもなつて来ている。

運動技術は自己テスト出来ると共に、技術そのものに自己表現の可能性があり又人間や社会の紐帯的な意義をも持つので種々な欲求を満足させる機会を豊富にもつている。

従つて個人のレクリエーション及それと関連する社会問題の解決に役立つと考えられる。

(4) 運動技術の倫理性

運動技術においては目的は立派な作品（フォームや成績）を生み出すことにあるのであつて、このような作品を生み出す活動者の道徳性と言うことは問題にならない。然し本来物を作ることと自分を作ることとは根本的に結びついていると思われ、我々は立派な人間になることによつて立派なフォームや記録を作ることが出来、立派なフォームや記録を作ることによつて立派な人間になることが出来ると思われる。

何となれば運動技術によつて作られるフォームや記録は一面では人間の意欲或は目的を満足させるためのものであると共に、他面では人間を必然的なもの（環境）に従はせた結果のものである。言い換れば運動のフォームは自由と必然との統一が身体の形において表現されたものであり記録は更にそれらが象徴的に表現されたものである。従つてこのようなフォームや記録然もそのすぐれたものを出そうとすればする程人間は必然的に次のような態度を強いられることになる。

1. 自己の意志を客観的なものに従える

環境の客観的な法則に反しては良いフォームや記録が得られないのみならず負傷したり場合によつては死ぬことすら在り得る。従つて人間の意志は恣意的であることが出来ない。

2. 厳しい訓練、鍛練に対し誠実に良心的に立向う

運動技術は正確であり厳密でないと役に立たない。従つてこれを修得するには科学的な考察と共に厳しい練習による行動の習慣化（随意運動の反射運動化）が必要である。鍛えられなければならない。一活動者個人の練習は主観的になりがちであるのでコーチがいる方がよい。一そしてこの訓練に対して活動者が誠実であり、良心的である程良い結果が得られるのである。

3. 協同を尙び責任を重んじる

技術は元来社会的なものであり、協同（協力）によつてのみ効果的であることが出来る。その意味では技術は協同（協力）を要求するとも言える。従つてそこから個人は必然的に責任を要求されることになる。チームゲームでは協同と

責任は運動技術の内容そのものであるが個人的種目においても練習にせよ試合にせよ協同なくして効果をあげることは出来ない。

従つてよいフォームや記録を出そうと運動技術の練習に打込めば打込む程、此のような態度を身につけざるを得ないが、このような態度は単に技術のみならず人間的にも極めて大切な道徳の内容でもある。道徳は抽象的な知識や良心の問題でなく人間を作ることが大切である。そしてそれ自身技術の必要がある。曾つて修養と言われたものは静的に人間を作る心の技術であると考えられた。然し現在のような複雑な流動する社会に在つて調和し立派に生活し得る人間を作るためにはより動的な技術が必要である。

運動技術はよいフォームや記録をつくることによつて自己を作つて行く或は人間を作つて行くとも言え、運動技術には本来人間形成的な意義があると言えるのである。特に情緒を伴う行動場面に於て激情をコントロールしつゝ、情緒の安定を保ち又多くの衝動を単に抑制することなく純化して人間の本质にふさはしい正しい形で表現させつゝ、行動させ前記のような態度をとらせる点では運動技術は人間の性格や人格を道徳的に形成する上に極めて重要な意味をもつものと考えられる。運動技術は動的な人間形成技術であると言えよう。

このことは練習の転移と言う点から言えば或は問題が残ると指摘されるかも知れないがシャーマンが言うように「個人が思う通りの仕方で振舞つて満足を得るような場面で幾多の経験を持つならば」運動技術の練習に於て得られるこのような態度、性格等は遙かに広い応用性もち又広範囲の場面に作用するものと信じられるのである。

(5) 運動技術と知識

運動技術は運動の瞬間々々に表現されて存在する目的必然性であり固有の存在性をもたないものであつた。然しこの目的必然性は瞬間々に消えて行く運動の後もその反省から自己の記憶に残留して持続する不変的な一つの原理或は法則となり得るし、又他人が作つたフォームや

記録に即しても会得され意識に把握される。

そしてこのようにして意識されると目的必然性は時間や運動の実践から離れてそれ自体固有の存在性をもつ技術についての知識となる。運動技術についての知識はこのような技術的な運動実践の瞬間々々に新に創造されるものであり、その意味では運動技術についての知識の成立と発展は運動の実践(練習やゲーム)と相関的であると言える。そしてその際運動に於て主体であり同時に道具的な意味をもつ身体がその可変性の故に練習を行つている間に、自分から分化し機能を変え発達して行くことが人間の知能に分化と発展をもたらすのであるから、知能も本来技術的であると言うことが出来る。

然しながら運動技術についての知識が運動技術の基礎であることも亦明瞭でこのような知識なしには運動技術の発展はあり得ない。知識のない運動技術の練習は狭い自己の経験の範囲を出ることが出来ず、無駄の多い割に効果を挙げる事が出来ない。その意味では運動技術の練習は実験の意味をもつと言うことが出来る。実験とは「一定のイデーを以て自然に問いを掛けること」であり「単に受動的に観察するのではなく自ら現象を作ることによつて現象を観察する」「経験を構成することによつて経験する」「単に見るのではなく作ることによつて見る」ことである。運動技術の練習は活動者が他人のフォームを見たり、いろいろな文献や資料から得たりした知識に基いて一つのイデーを構想しそれを自己の身体を道具とし材料として実験しているとも考えられるからである。運動技術はそれの成立する環境を支配する客観的な法則を認識し、その認識に基いて環境に働きかけこれを変化する時生れるのであるから粗野な経験主義では良いものが生れる道理はなく、科学的な知識に基き、更に自己の身体に対する自覚を加えて一定のイデーを構想しこれを自己の身体を使つて実現してみる、フォームや記録を生産し、それを作ることによつて知ると言う過程を含まなければよいものが生れる訳がない。練習は先に述べたように既に明かにされた目的必然性の実験的体得とこの新しい目的必然性の実験的探究

と言う意味を含むものでこのような意味を持たない単なる運動の実践、経験では効果が少ないであろう。

従つて運動技術についての知識や運動技術に関係のある科学が運動技術の基礎であることは言うまでもない。科学の発達なしには技術の発達も亦あり得ない。然しながら科学の発達のためには又運動技術の発達が必要であることは先に述べた通りである。自己の身体の自覚にしても単に自己の中に沈潜することによつて得られるものでも科学的な知識のみによつて得られるものでもなく、自己の身体を使つて実際にフォームや記録を作り出し、それを観察し反省するという過程なしには不可能だからである。

従つて従来なかつたような新しいフォームや記録（例えば 100 米 10 秒と言う様な）を出すことは新しい運動技術の創造であると同時に科学の世界における偉大な発明にもひつてきするような文化的な意義をもつ大偉業であると言つても誤りではないだろう。

(6) 運動技術の媒介性

活動者はいろいろな運動技術を求めて練習する。その際直接手がかりとなるものは常に自己が運動技術によつて作り出したと考えられるフォームであり生産物であると考えられる記録である。活動者はそれを見、それから反省して自覚し、今迄の経験を基にして又技術のイデーを構想し、実験してみると言う過程を繰返す。然し結局よいフォームや記録はそれを生み出す道具としての身体の有用性なしには考えられないので身体支配を練習する。然しこれは結果としては可変的な身体自体の機能形態の変化を生み出すことであり、実際には身体を作り上げることであつた。このことは活動者がよいフォームや記録を求めて或はそれを生み出す運動技術を求めて練習することは実は自己の身体を作り上げていることに他ならないと言うことであり、これは又運動技術が身体形成を媒介すると言つても誤りではないであろう。

運動技術は又同様にして自己の心の形成を媒介すると言える。即試合の場で不安、恐怖等から「上つたり」「固くなつたり」又怒つて「粗

雑になつたり」することはよいフォームや記録を作る上に極めて不利である。このことの自覚から、活動者は自己の情緒の安定を、練習に一生懸命打込むことによつて自然に獲得しようとしたり、又は意識して特に努力することによつて獲得するからである。

従つて運動技術が生み出すと考えられるフォームや記録は実は運動技術が媒介した身心の機能の総合表現であり、記録はその象徴的なものと見られるのである。象徴的なものは象徴される母体と離れては意味がない。運動の記録がそれを作つた活動者から離れては存在の意義も価値も有たないのはそのためであろう。

運動技術が媒介する身心の機能の変化とは具体的に言えば、神経系統、筋力、器官力（持久力）発達、成長、情緒の安定、健康等である。

たゞしその程度は運動種目、活動者の素質、運動の行われ方（練習や試合の在り方）等によつて異なることは言うまでもない。

その他に運動技術が媒介するものとして社会的な性格、合理的創造的な態度、倫理的な態度があげられる。

運動技術は運動のフォームや記録を作り出す技術であつて目的はフォームや記録にある。然し運動技術は人間の身心及性格や態度の発達を媒介する。その意味では運動技術は実質的には人間的技術或は人間形成的技術であるとも言えよう。

然し運動技術にとつては人間形成は目的ではなく媒介するものに過ぎない。技術に人間形成媒介の機構があると言つても運動技術を目的にすれば必ずそうなるとは限らない。活動者の練習の仕方が問題である。然しそれは運動技術自体にとつては関係のないことであろう。

七、む す び

以上の如く運動のフォームや記録の生産を目的とする運動技術は身体を道具とするが故に、身体操作の技術的堪能を求めて練習している間に実は身体を形成し、更に試合の場でよいフォームや記録を得んとするが故に心を形成する機構をもつことが明かである。言わば運動技術は

直接目的はフォームや記録の生産であつても実質的には人間形成を媒介する人間的技術の意味をもつていのである。しかも運動技術が合理的創造的な性格をもち社会的な性格をもつことは運動技術の媒介形成する人間が社会的人間であり、すぐれた知能をもち合理的な思考を向ふ人であることを又道徳的な態度や性格をもつた人であることを暗示する。

従つてこのような運動技術の修得のために真剣に打込めば打込む程必然的に人間は身体的精神的社会的に健全な人間になるようになっていく訳であつて、こゝに運動技術のまたと得難い教育的価値の潜在を認めることが出来る。然し技術の練習をすれば優れた人になるとは限らない。運動技術は決して最初から人間形成を目的とする技術ではない。目的はあくまでもフォームや記録の生産にあり勝つことにあつてと思う。然しそれを真剣に考え努力すれば自ら人間形成を媒介するに至るのであつて、このような媒介性こそ運動技術の本質であると思う。最初から人間形成をねらうものは体育であつて運動技術ではない。運動技術は人間形成を媒介するのである。

このような人間形成を媒介する運動技術は最初から人間形成を意図する体育においては当然目標でなければならぬ。体育ではむしろこのような運動技術の人間形成的な機構を意図的に利用して人間形成を図らうとするのである。何故なれば運動技術自体が人間形成的な機構をもつているとしても、それに対する活動者の対処の仕方が問題であつて、対処の仕方が真剣でなかつたり、科学的な知識に乏しかつたり自覚が未熟で単に目前の興味や勝敗のみに把はれたりしたのでは方法的な誤りを犯し真に運動技術のもつ潜在的な価値を顕現することは出来ないからである。従つて未成年の者や自覚の未熟な者に対しては常に指導が必要になる。

このように考えて来ると先にあげた体育とスポーツとの関係が一層明になるであろう。スポーツはこれに真剣に対処して練習すれば直接目的は技術の追求とその表現にあつても実質的には技術の媒介する人間形成作用によつて体育と

なる可能性があり、これに対し体育はこのような運動技術の価値を意図的に顕現しようとするものに他ならないからである。従つて体育においても運動技術は目標である。運動技術を目標にして練習する学習者の活動を正しくして運動技術の媒介するものをも正しく学ばせようとするのが体育に他ならない。

前川氏は技術の体育的価値はそれが学習を動機づけることゝこれによつて自己表現がなされる点にあると言つておられる。確にその通りであると思う。その故に運動技術は体育の目標であり、又、目標であらねばならぬ。

然し前川氏の言葉は又、実は運動技術の本質が媒介性にあることをも指摘しておられるのであるとも考える。従つて私は運動技術は窮極目的たる人間形成を媒介するものなるが故に体育の目標であり又、目標であらねばならぬと思うのであるが、それはあくまでも唯一のものでなく諸目標の中の一つであらねばならぬと考えるのである。

主なる参考文献

- 三木 清 「技術哲学」岩波書店
- 高山岩男 「哲学的人間学」岩波書店
- 加藤橋夫 「スポーツの社会学」世界書院
- 今村嘉雄 「スポーツの民族学」大修館書店
- 前川峯雄 「体育学原論」中山書店
- 川村英男 「体育原理」体育の科学社
- ジャクソン・R・シャーマン 今村嘉雄訳「近代体育原理」新思潮社
- 松井三雄 「体育心理学」杏林書院
- 後藤岩男 「体育の心理」金子書房
- 加藤橋夫 「保健体育概論」東京大学出版会
- 岩波講重 「教育学概論Ⅰ」岩波書店

(昭和35年11月18日受理)